

寅年・新春記念展

丹波を訪れた四人の巨匠たち

人と人との縁というのは、様々な出会いから始まるものです。

本展覧会で紹介する四人の日本画の巨匠たちも、丹波に住む詩人、俳人、画家や実業家との出会いから親交が深まり、丹波で多くの絵を描き残しています。

ここでは、四人の作品や丹波との出会いを紹介いたします。

作品解説

翠石にとって母子の虎は重要なテーマであり、生涯を通じてしばしば描いています。

子らの柔らかい毛と母の剛い毛が対比的に描かれて、翠石の技巧の確かさを知ることができます。



大橋翠石「母子虎之図」個人蔵

順路1 「芋銭の章」



小川芋銭「河童図」個人蔵

芋銭は、生涯のほとんどを河童伝説の残る茨城県牛久沼近くで、農業を営みながら暮らしました。水辺の生き物や魑魅魍魎（ちみもうりょう）への関心が高く、特に河童の絵を多く残したことから「河童の芋銭」として知られています。

丹波との出会い

茨城県牛久市出身の小川芋銭は、市島で酒造りを営む西山家当主の俳人・西山泊雲との交流から、両家の子ども同士の結婚に至る縁の深い関係となり、複数回の来丹で多くの絵を残しています。

作品解説

芋銭の河童は、妖怪のような姿と愛くるしい姿で描かれるものがあります。この作品は、穏やかな色調の水草か水辺の花の中を悠然と泳ぐ、愛くるしい姿の河童が描かれています。

淡墨を重ね、輪郭をぼかしたその姿は、空中を遊泳するかのような浮遊感に満ち、夢幻境（夢か幻の世界）に浮かぶかのような表情には、心をひかれるものがあります。丹波に残る芋銭作品のなかで、最も優れたものといえる1点です。

順路2 「鉄斎の章」



鉄斎は、幕末から近代にかけて京都が生んだ世界的な文人画家で、全国を旅し、万巻の書を読んだ最後の巨匠とされています。

丹波との出会い

母が黒井村の生まれの京都三条出身の富岡鉄斎は、城崎で知り合い詩友となった衣川左兵衛が住む佐治に二度滞在し、絵を描いていました。



富岡鉄斎「七福遊戯図」鉄斎堂

作品解説

七福神は、布袋、大黒天、寿老人、毘沙門天、恵比須、弁財天、福祿寿の七柱の神様の総称で、鉄斎が好んだ画題のひとつです。中国絵画や大津絵に学び、ユーモラスに表現された神々の姿は、今日でも見る者を楽しませてくれます。

鉄斎の大胆かつ迫力のあるスピーディな筆使いと洗練さ・面白さをまじえた筆力の作品は、他に類を見ません。

その作品の多くは、ユーモラスな表現に満ちて、人物は生き生きと描かれています。

特に目の表情がポイントで、マンガチックです。

順路3「鉄斎・楳嶺の章」



楳嶺は、京都画壇の近代化を開いた先覚者で、多くの優秀な画家を輩出した卓抜した教育者です。その作品は、写生主義を貫き、風景画をはじめ、人物・花鳥・動物・魚など独自の近代的で知的な構成力による細やかな情感を見せています。

丹波との出会い

京都四条出身の幸野楳嶺は、成松の画家田中庄三郎宅に滞在し、約半年間絵を描いていました。

作品解説

楳嶺は雪景色を好んで描きました。その描きかたには、雪が積もった風景を俯瞰的に捉えたものと雪が舞う様相を近接して捉えたものがあります。

この作品では、樹木などに降り積もる雪を外暈(そとぐま・注1)を用いて、紙や絹の白地を塗り残すことで表しています。

白地の雪からは、それが重たいのか、サラサラしているのか、その質感すら感じられます。胡粉(ごふん・注2)を用いて直に雪を表現するのではなく、描かないことによるリアリズムが生れています。



幸野楳嶺「雪中梅図」京都市立芸術大学芸術資料館

(注1) 輪郭の外側をぼかすことで、雪などの白さを引き立たせる技法

(注2) 貝がらを焼いて作った白色の顔料

順路4 「翠石の章」

翠石は、「虎の画」でパリ万博とセントルイス万博で連続して金メダル（金牌）を受賞し、明治時代に世界で最も高く評価された日本画家です。翠石の描く虎は、まるで目の前で生きているように感じさせる迫力と緻密さで描かれています。

丹波との出会い

岐阜県大垣市出身の大橋翠石は、背景描写の参考のため川代溪谷の写真撮影を柏原の岡林依水軒に依頼しました。そのことがきっかけとなり、亡くなる直前まで親しい交流が生れ、岡林家の人々の前で絵を描いています。

作品解説

翠石は、所有する自作に箱書きを施すことが極めて稀で、本作は例外的に翠石の共箱が添う特異なものであります。

他にも薔薇とともに描く、通例の猫の図ではなく、一匹だけを描いていることや正午の猫のように瞳孔を細く描いてはいないことなど、特異な点がたくさん見られます。

あえて表具し、箱をあつらえた背景には、モデルが翠石自身の特定の愛猫であった可能性があります。

その愛くるしさに翠石に筆を執らせ、特に表具してその姿を長く家に伝えたいと思わせるほどに可愛がられていたのではないだろうか。

翠石の猫への思いを伝える一点です。



大橋翠石「仔猫図」個人蔵

順路5 「虎の章」

順路5では、今年の干支「寅」にちなみ、「虎」を画題とした作品を紹介しています。翠石は、上の作品のように動物画、特に猫を得意としていましたが、知人より「猫が描けるのなら、虎も描けるのではないか」と勧められ、以降虎を手がけるようになりました。多くの日本人にとって虎は、江戸時代の終わり頃になるまで、見ることはできませんでしたが、1892年頃、濃尾大震災の焼け跡で虎の見世物興行があり、翠石は、そこに10日間ほど通い、実際の虎を克明に写生して、画技を向上させ、独自の虎画を確立しました。